

超音波断層法が有用であった閉鎖孔ヘルニアによるイレウスの一症例

武田 千恵美,小倉 文子,日比野 みゆき,丹羽 景子,鮎川 宏之
(医仁会武田総合病院)

<症例>

患者：92歳、女性。主訴：嘔吐、腹部膨満感

既往歴：左大腿骨頸部骨折、喘息。分娩歴：3回。

現病歴：平成16年1月30日の夕食後に嘔吐出現。2月2日近医にて、イレウスと診断され絶食・点滴で保存的治療を行うも軽快しないため2月3日当院紹介入院となる。

入院時現症：身長147cm,体重36.2kg,血圧120/54mmHg,心拍数84回/分,体温37.1

<入院時血液所見>

CRP 14.8mg/dl,白血球数 10800/ μ l,BUN 44.2mg/dl,CRE 1.4mg/dl,CPK 313 IU/l

<腹部超音波所見>

小腸は全体的に拡張し、特に膀胱の右上方あたりは腸管の緊満感が激しく内容物の流動性は全くみられなかった。次に右の鼠径部を観察すると、恥骨の背尾部にほぼ円形の腫瘍を認め、壁構造から腸管と推測し、閉鎖孔から逸脱したヘルニア腸管を考えた。

<経過>

緊急手術施行。回盲部より50cm口側の回腸が嵌頓しており腸管壁は壊死が疑われたため切除された。

<閉鎖孔ヘルニア>

閉鎖孔：骨盤腔の前方の坐骨、恥骨および腸骨に囲まれる三角形の空隙。

閉鎖管：閉鎖孔の外上方にあり、閉鎖神経、閉鎖動静脈が通る管で大きさは平均1.8×1.3cm、長さ2cmといわれ通常は脂肪織により充填閉鎖されている。

症状：1)Howship-Romberg徴候 2)イレウス症状

頻度：高齢の痩せた多産の女性に多い。全ヘルニアの0.073%、イレウスの0.5%

<考察>

嵌頓壊死をおこしやすい閉鎖孔ヘルニアを超音波検査にて早期診断することはとても重要なことであるので、閉塞部位のわからないイレウス症例の腹部超音波検査施行の際は、鼠径ならびに恥骨レベルまで走査することが必要であると考えられた。

(医仁会武田総合病院生理検査科 075-572-6331)